

[要旨]

ひとつの身体・ふたつの国 国際結婚と帰属意識をめぐる芸術実践

1319913 スクリプカリウ落合 安奈

本論文は、日本とルーマニアの二つの母国を持つ筆者自身が経験したアイデンティティ・クライシスと、それに伴う「帰属意識」を軸に、歴史的な国際結婚や移動、芸術実践を通じて多文化共生の可能性を考察するものである。沖縄で沖縄の人から「沖縄の人」と認識され、心理的安定感を得た経験は、筆者に「仲間」として迎え入れられる感覚の重要性を気づかせた一方で、その裏に潜むミックスルーツを巡る差別の歴史を目の当たりにしたことが本論の問題提起となった。この体験を出発点に、本論文は「帰属意識」の姿と多文化共生の課題を多角的に検討し、霊長類学や芸術実践を通じてその本質に迫る。

第1章: 帰属意識—好意と敵意—

沖縄で「沖縄の人」と認識された経験から、筆者は帰属意識の重要性に注目する。この意識は、「仲間」としてのつながりを生む一方で、「外部」を排除する矛盾を抱える。本章では、ナショナリズムの起源を遡り、現代社会における帰属意識の役割を分析し、その根底にある人間の心理的・生物学的要因を考察する。

第2章: 帰属意識の揺らぎ

「ハーフ」研究の社会学者である下地ローレンス吉孝やケイン樹里安、上原健太郎などの先行研究を基盤に、アジアの日本と東欧のルーマニアの儀式に見る共通性や差異の考察から帰属意識の揺らぎや、人類という大きな視点での共通性に注目し、筆者自身がルーマニアで体験し、撮影した写真作品とともに論述する。

第3章: 《骨を、うめる》の3年間のベトナムと長崎での研究と、歴史的「国際結婚」の姿

本章では、大航海時代の朱印船貿易と日本の鎖国政策に焦点を当てる。まず2019年の筆者の2回のベトナムでのフィールドワークをもとに詳述する。ベトナムのホイアンで出会った、江戸時代の日本人商人の墓をめぐる言説、および2020年9月にその商人の故郷である長崎県平戸にて再度行った研究について論じる。長崎の江戸時代の国際結婚や境界を越境する存在にまつわる様々な記録や言い伝えを考察し、そこでの新しい発見についても言及する。

第4章: 移動による異文化の出会い

パンデミックによる移動制限下で、埼玉県立近代美術館にて開催された筆者の展覧会「Blessing Beyond the Borders—越境する祝福—」では、「鎖国と国際結婚」をテーマに、移動が果たす役割や影響を探究した。しかし、緊急閉館や国と地域の分断が現実となり、移動制約の影響が明らかになった。本章では、人間が「移動する存在」として社会を築いてきた特性を考察する。また、その視点をもとに制作した《Mirrors》シリーズを通じて、筆者の制作論を展開する。

第5章: もう一つの母国ルーマニアで、生きる術を獲得する1年間の研究

2022年12月からの1年間、筆者はルーマニアで「土地と人の結びつき」をテーマとする研究を行った。現地でのフィールドワークでは、共同体の中に息づく帰属意識の機能を観察し、筆者が日本で行ってきた研究と比較や考察を重ねながら多文化共生のヒントを探った。これにより、帰属意識の柔軟性や再構築の可能性について重要な知見を得た。

第6章: 提出作品と研究における今後の課題

本論文の成果として制作された大型インスタレーション《ひかりのうつわ》では、2つの異なる文化の狭間で「人間の営みが生き物として様々な形で引き継がれていくこと、そしてそこに苦しみや危険が伴ったとしても本能レベルで繋げていきたいと思うのはなぜなのか」というテーマと向き合った。この作品は、文化が時間や空間を超えて繋がる過程を表現するとともに、人間が本能的に次世代に文化を引き継ごうとする理由を問い直す試みである。筆者は、博士展出品作品をひかりの彫刻として位置付けている。作品を通じて、多文化共生社会に向けたビジョンを提示すると同時に、今後の課題を論じる。

終章

ルース・ベネディクトの『レイズム』の問い「人種差別はどのように克服されるか」を軸に、本論文の結論を提示する。江戸時代から現代に至る国際結婚の事例を基に、日本における「単一民族」の幻想に挑み、多文化共生社会の課題を提言する。また、パンデミックが生んだ移動制約の経験を踏まえ、未来に向けた多文化共生の新たな形を模索し、本論を締めくくる。

本論文は、筆者の個人的体験を基盤に、「帰属意識」や「多文化共生」をテーマに多角的な視点で考察し、普遍的な社会課題への具体的な示唆を提示するものである。